

# LIKEとWANTのNP<sub>1</sub>

—Word Grammarの一環として—

大喜田 由 馬

(愛媛大学教育学部英語学研究室)

0.1. likeとwantは英語でもっとも使用頻度の高い300語のうちに数えられ<sup>11</sup>、日本の中学校用英語教科書にも早々に登場する動詞である。従って、英語を習ったことのある日本人でこの2語を知らない者はいないと言ってよいほどであるが、その用法の詳細は案外に知られていないようである。理由の一部は、英語学習の最初期に、両語があまりにもありふれた存在になってしまうことにあると思われる。本稿では、この問題の一端を、主として日英対照言語学 (Japanese-English contrastive linguistics) の立場から考察してみたい。

0.2. このような英語の動詞likeとwantがそれぞれ(1)と(2)の意味をもち、“X + NP<sub>1</sub> + Aux + V + NP<sub>2</sub> + Y”構造 (NP=名詞句, Aux=助動詞句, V=動詞, X, Y=変項) のVの位置に現われる場合、そのNP<sub>1</sub>にはどのような性格の名詞句がなるのであろうか。

(1) like = (habitually) find NP<sub>2</sub> satisfactory or agreeable

(2) want = desire to have NP<sub>2</sub> (on a particular occasion or to fill a real need)

この意味のlikeとwantのNP<sub>2</sub>にもいくつか検討すべき問題点——例えば、likeのNP<sub>2</sub>には世間的にはめられないものを表わす名詞は来にくいとか *Want Contexts* など<sup>21</sup>があるのに、そのNP<sub>1</sub>だけを取り上げるのは片手落ちの感があるが、論議を簡明にするために今回は後者に的をしぼることにする。なお、両動詞の意味を(1)と(2)の場合に限定したのは、同じ“X + NP<sub>1</sub> + Aux + V + NP<sub>2</sub> + Y”構造のVの位置に来る、次の例に見られるようなlikeとwantを除外するためである。

(3) I like lobster but it doesn't like (= agree with) me.—*OALD*, s.v. Like<sup>2</sup> 5

(4) She likes red but it doesn't like (= become) her.—*Web*<sup>3</sup>, s.v. Like<sup>1</sup> 26

(5) This soup *wants* (= needs) a little more salt.—*Holt Basic*, s.v. Want

(6) This house *wants* (= lacks) none of the usual modern features but I do not like it.

<sup>31</sup>—*Chamber's*, s.v. Want

論述を具体的に進めるために、まず問題のlikeとwantの用例をあげておこう。

(7) a. *I* like draft beer.

b. Do *you* like classical music?

c. *Jane* likes modern dance.

d. *A dog* likes bones.

e. *The businessman* likes efficiency.

- f. *One* likes his neighbors but loves his family; *one* likes the open country but loves his native land.—*Web Syn*, s.v. Like
- g. *Some* /s(ə)m/ students like math and science very much.
- h. *Some* /s(ə)m/ girls don't like homemaking so much.
- i. *A civil engineer* likes one of their daughters.
- j. *The cat* liked her son and wanted to play with him most of the time.
- (8) a. *I* want a cup of hot cocoa.
- b. *We* want wives that “obey”.
- c. *Tom* wants some help.
- d. *Horses* want carrots at any time.
- e. *The unemployed* want jobs everywhere.
- f. *The French* want European unity.—*Web Syn*, s.v. Want
- g. *Everyone* wants a share in the profit.
- h. *Boys of his age* want independence more than anything else.
- i. *Three girls* want a day off next Thursday.
- j. *His pet* wanted something to drink, didn't she?

(1)の意味をもつlikeと(2)の意味をもつwantのNP<sub>1</sub>の問題は、少くとも次の3つの角度から考えてみることができる。

- (9) i. NP<sub>1</sub>にどのような種類(category)のものを表わす名詞が来るか。  
 ii. NP<sub>1</sub>(=経験者)と話し手[書き手](=ノキ認知者)との関係はどうか。<sup>4)</sup>  
 iii. NP<sub>1</sub>(=主語)はどのような指示(reference)の仕方をするか。

1.1. (9i)の問題点から検討してみよう。ここで取り上げたlikeとwantは、agree, hope, intend, pity, wishなどととも、心的過程(mental process)のうちの“states of emotion and attitudes”を表わす動詞に属している(*CGEL*, § 4.29)。そのため、両動詞のNP<sub>1</sub>には、《人間(human)》—この場合はとりわけ《意識を有する(conscious)》—という意味特徴をもつ名詞が来る。とくに英語では、話し手間の個人差や特定の場面の影響を別にすれば、人間以外に“pets, domestic animals and other higher mammals”もしばしば意識を有する《準人間的(human-like)》な存在として扱われるので(Halliday (1985: § 5.3)), (7d), (7j), (8d), (8j)のような例は珍しくない。

- (10) Proper handling is basic in establishing human-pet relationships; some *animals* enjoy much physical contact, while *others* dislike even being touched.—*Ency. Brit.* 14, p.150l

- (11) A cat can do without human companionship from time to time, and sometimes it does not even want it.<sup>5)</sup>—*Ency. Amer.* 21, p. 796r

ただし、同じ心的過程を表わす動詞でも、特別な擬人化(personification)を除き、NP<sub>1</sub>に《人間》名詞以外は認めないものもあるので注意が必要である。例えば、trust(信頼している)のNP<sub>1</sub>にはlikeとwantの場合とだいたい同じ種類の名詞が来るが、believeのNP<sub>1</sub>には《動物》名詞はまれで、《人間》名詞だけが認められる傾向がある。<sup>6)</sup>

- (12) The *horse* trusted Annie all along.

(13) ?Our dog believes Mother.

believeは、likeやwantと異なり、imagine, know, realize, think, understandなどとともに“intellectual states”を表わす動詞に属している上に(CGEL, § 4.29), その語義が「事実情報(factual information)に真(マコト)があると思う」というきわめて知的で限定された内容をもつからであるらしい。なお、次例と比較。

(14) A general rule is to use punishment sparingly and only in situations that the dog understands.—*Ency. Brit.* 5, p. 932r

(15) Dogs make better pets than cats because they are more friendly. They understand and obey their masters, but cats like to live their own life.—江川(1966<sup>5</sup>: 198)

1.2. 日本語でも、「好きだ [好く]」、「ほしい」——それぞれここで問題にしている like と want の対応語——の NP<sub>1</sub> には、《人間》名詞だけでなく《動物》名詞も用いられる。

(16) a. 子供たちはアイスクリームが好きだ。

b. ポチは僕が大好きらしい。

c. とらはみけを好いている。

(17) a. 奈美は男の「自由」がほしいそうよ。

b. あの小鳥もつれあいがほしそうだ。

c. 彼の馬はかいばをほしがっているようだ。

しかし、一般に日本人が身近な動物に「意識」を認めているかどうかは疑問である。少くとも彼等は、Hallidayが英語国民について言っているほどはっきりと、「動物」と「意識」とを結び付けては考えていないと思う(⇒1.1)。日本語を母国語とする人なら、普通、次の引用文に見られるような叙述はしないであろう。

(18) Most horses can sense a rider's uncertainty, nervousness, or fear, and are thereby encouraged to disregard the rider or even deliberately disobey him.—*Ency. Brit.* 8, p. 1090l (たいていの馬は乗り手の不安、弱気、あるいは恐れを感知し、それによって乗り手を無視する気になったり、故意に彼の言い付けに背く気にさえなる。)その理由としては、少くとも言語的なものと生活文化史的なものとが考えられる。

(19) i. 上記の(16)–(17)にも見られるように、日本語は他者の心的過程を直接的・客観的に認定することを避け、それを外面的に捉えようとする。従って、いわゆる感情移入(empathy)の問題も、日英で微妙な差を見せるようである。<sup>7)</sup>

ii. 従来日本人は動物と生活に密着した交渉をあまりもってこなかった。彼等の身辺にいる動物、犬、猫、馬、牛、山羊、羊、豚、鶏、鳩などは、すべて日本以外のところで家畜化(domestication)されたあと輸入されたものである。そのため日本人は、日常的な意味で、動物の「心」を考える習慣が身につけていない。

(19i)については、次節で多少詳しく論じることにする。(19ii)に関しては、結論的にはKodansha *Encyclopedia of Japan* (s.v. Animals)が言っているようなことになるであろう。<sup>8)</sup>

(20) From the above discussion, it is understandable that a peculiarly Japanese view of animals did not develop. It is also possible to say that the idea of animals being indispensable to human life (a concept basic to both hunting and herding cultures) is rather weak in Japan. Animal imagery, such as that surrounding

sheep, deer, rabbits, and horses in the West, did not develop in any powerful or pervasive way in Japan.

Since ancient times the Japanese have made nature—animals and plants—the subject of poetry and art. The majority of Japanese consider this to be an expression of the Japanese “love of nature.” Nevertheless, it was only in the 20th century that a genuine concern for the life and welfare of animals developed and conservation efforts gained broad popular support.

2.1. 次に(9ii)の問題を考えてみよう。一般に心的過程は、人目にふれない私的(private)なものであるから、buy, catch, eat, run, visitなどの動詞が表わす公的(public)な物的過程(material process)と異なり、本来その経験者(experiencer)しか認知できない性質のものである。従って、likeやwantのNP<sub>1</sub>(=経験者)が話し手である場合は問題がないが、それ以外の場合にはいろいろな制約が生じることが予想される。(7)と(8)のいくつかの例とその日本語訳とを対比しながら、心的過程の経験者と話し手(=キ心的過程の認知者(perceiver))との関係にふれてみたい。

(7a) I like draft beer.

(21) 私は生ビールが好きだ [です/よ]。

(22) ?私は生ビールが好きらしい [そうだ/なようだ]。

(23) ?私は生ビールを好いている。

(7c) Jane likes modern dance.

(24) ジェインはモダンダンスが好きだ [です/よ]。

(25) ジェインはモダンダンスが好きらしい [そうだ/なようだ]。

(26) ジェインはモダンダンスを好いている。

(8a) I want a cup of hot cocoa.

(27) 私は熱いココアが一杯ほしい。

(28) ?私は熱いココアが一杯ほしそうだ [ほしらしい [ようだ]]。

(29) ?私は熱いココアを一杯ほしがっている。

(8c) Tom wants some help.

(30) ?トムは少し手伝いがほしい。

(31) トムは少し手伝いがほしそうだ [ほしらしい [ようだ]]。

(32) トムは少し手伝いをほしがっている。

英語では、心的過程の経験者(=認知者)=話し手の場合も、そうでない場合も、その叙述形式に特別な違いはない。どちらの場合も、(7)と(8)の諸例に見られるように、like(好い・ている)やwant(ほしい/ほし・がっ・ている)などの本格的な状態動詞——状態の持続は外部からの観察の可能性につながる——が非進行形で用いられるだけである(Halliday(1985:109))。

これに対し、日本語は、次のような手段によって、心的過程の経験者キ話し手(=認知者)の事態に対処している。

(33) i. 「…だ [です]」(断定の助動詞), 「…よ」(主張の終助詞)

ii. 「…らしい」(推量の助動詞)

iii. 「…そうだ」, 「…(な)ようだ」((断定の助動詞+ )様態/比況の助動詞)<sup>9)</sup>

iv. 「…ている」, 「…がっ・ている」(動作化の接尾辞+)状態化の非自立動詞)

(33 i – ii) は、心的過程の経験者に対し、話し手—自身がその経験者である場合も含め—の立場を確定するものであろう。「好く」, 「ほしい」に続く推量の助動詞としては、「らしい」のほかに、「う」, 「だろう」, 「でしょう」がある。

(34) ジェインはモダンダンスを好こう [好くだろう [でしょう]]。

(35) トムは少し手伝いがほしかろう [ほしいだらう [でしょう]]。

なお、次の例も、話し手の立場を守ることによって、他人の心理状態を「直叙」することを避けている。

(36) a. (私は) ジェインはモダンダンスが好きだと思う。

b. ジムは広々とした海がなによりも好きだそうだ。

(37) a. (私は) トムは少し手伝いがほしいと思う。

b. アニーは元気な男の児がほしいそうよ。

(36a)や(37a)に、日本人が英語を話すときに頻用する“I think…”の「根っ子」の一つがあると思う。(36b)と(37b)の「伝聞」の助動詞「(好きだ/ほしい)そうだ [よ]」—既出の様態の助動詞「(好き/ほしい)そうだ [よ]」と比較—の場合は、心的過程の経験者、その認知者、話し手(=認知者のことばの報告者)がそれぞれ別人である。(33 iii–iv)の様態化・比況化・動作化・状態化はいずれも心的過程を「外面化」して、それが経験者以外にも観察可能であることを示す。「トムは少し手伝いがほしそうだ。」はトムの現状を述べたことになるが、(30)の<sup>iii</sup>「トムは少し手伝いがほしい。」は、\*「トムはうれしい。」と同様、そうはならない点に注意すべきである。(33 ii–iv)は他人の心の世界を叙述するのに適した形式であるから、それを話し手自身のことについて用いると、(22), (23), (28), (29)に見るように、自分のことを人ごとのように語ることになり、普通は不自然である。「ながい」, 「美しい」, 「優しい」などの性状形容詞と「ほしい」, 「うれしい」, 「寒い」, 「痛い」などの感情・感覚形容詞とを統語的にも区別する日本語は、他者の内面の世界に対して、英語とは多少違った姿勢をとるようである(⇒ 1.2)。

2.2. 聞き手の“you”がlikeやwantのNP<sub>1</sub>(=経験者)になる場合は、第三者が両語のNP<sub>1</sub>になる場合に加え、別の考慮も必要になる。

(38) <sup>?</sup>You like fish.

(39) <sup>?</sup>You want some salad oil.

(40) <sup>?</sup>You are cold [sad].

上の例で、話し手は、他人の私的な世界に踏み込んでいるだけでなく、目の前にいる相手に向い、その心的状態についてなんらかの断定(assertion)を下している。これは、日英語を問わず、儀礼上の配慮を欠いた行為である。(38–40)が普通「語用論的」に不適切(“pragmatically” inappropriate)であるとされるのは当然である。下記の間接報告文の例に見られる「心理述語」(“psychological predicate”)のNP<sub>1</sub>に対する制約も、この「無作法」に関係している(今井・中島(1978: 269–71); 山梨(1986: 66–67)参照)。

- (41)  $I_i$  told  $Jim_j$  that  $\left\{ \begin{array}{l} *he_j \\ I_i \\ they \end{array} \right\}$  liked fish.
- (42)  $Jim_i$  told  $me_j$  that  $\left\{ \begin{array}{l} *I_j \\ he_i \\ they \end{array} \right\}$  wanted some salad oil.
- (43)  $I_i$  whispered to  $Jane_j$  that  $\left\{ \begin{array}{l} *she_j \\ I_i \\ he \end{array} \right\}$  was cold [sad].

対照的に、likeやwantは、(7b)の疑問文や次の例に見るように、多少とも断定が緩和されるような文脈では自由に“you”をNP<sub>1</sub>にとることができる。

- (44) a. Do you like kiwi fruit? (Question)  
 b. You want some melons, *don't you?* (“Tag”)  
 c. *I think* you like some other type of car.<sup>11)</sup>  
 d. *If* you want any of this, please tell me.  
 e. *I hope* you like our present.  
 f. You *must* be hungry.  
 g. *I'm afraid* you are bored with my parents.

これに並行して、次の間接疑問文の例では、上述の間接報告文とは逆の制約が見られる。

- (45)  $I_i$  asked  $Jim_j$  whether  $\left\{ \begin{array}{l} *I_i \\ he_j \\ they \end{array} \right\}$  liked kiwi fruit.
- (46)  $You_i$  asked  $me_j$  whether  $\left\{ \begin{array}{l} *you_i \\ I_j \\ she \end{array} \right\}$  wanted any melons.
- (47)  $Jim_i$  asked  $Jane_j$  whether  $\left\{ \begin{array}{l} *he_i \\ she_j \\ you \end{array} \right\}$  was/were bored.

結局、相手の人にその心理状態についてたずねるのが自然であるのと同じ程度に、自分の心的過程について人にたずねるのは不自然であるからであろう。

- (48) You ask me which part of it I like, and I answer that I don't like any of it.—Palmer (1938), s.v. Any III  
 (49) \*I like to bake cakes, don't I?—Hooper (1975: 104)  
 (50) ?Do I want Sue's help?

(50) は、普通、独言か“Do you want Sue's help?”に対する問い返し疑問 (echo-question)<sup>12)</sup>かのどちらかである。

3.1. (7)と(8)の例文に返って、(9iii)の問題——likeとwantのNP<sub>1</sub>(=主語)はどういう指示の仕方をするのか——を考えてみよう。

(7a-b)と(8a-b)に見られる1, 2人称の代名詞は、発話〔書記〕場面で、特定の

(specific)<sup>13)</sup>—どの種類のどの個体(individual)を指すかが少くとも話し手か文の主語に分かっていること—で唯一的(unique)な人物を指す。(7j)の *the cat* や(8j)の *his pet* の場合は、場面・文脈的にそれがどの *cat*、どの *pet* を指すのかが、話し手のみならず聞き手にも明らかである。(7c)や(8c)の固有名詞は、場面・文脈にかかわらず、特定の唯一的な指示をする。(8f)の *the French* は、非特定の(nonspecific)ではあるが、固有名として恒常的に唯一的な人間集団を指す(CGEL, § 5.56)<sup>14)</sup>。

(7d)の *a dog* と(7e)の *the businessman*,  $\phi$ 冠詞をもつ(8d)の *horses* と(8e)の *the unemployed* (= *unemployed people*) では、冠詞の数量的・特定のな意味は背景化し、名詞句の全体は総称的(generically)に個体が所属する種類を指示する。そして、多くの場合、総称的な *a* は *any* で、同種の  $\phi$  は *all* で、それぞれ置き換えることができると言われる。例えば、(7d)  $\equiv$  (51)<sup>15)</sup>, (8d)  $\equiv$  (52)。

(7d) *A dog likes bones.* (犬は骨が好きだ。)

(51) *Any dog likes bones.* (どの犬も骨が好きだ。)

(8d) *Horses want carrots at any time.* (馬はいつでもにんじんをほしがる。)

(52) *All horses want carrots at any time.* (馬はみんないつでもにんじんをほしがる。)

しかし(7d)と(51), (8d)と(52)はもともと別の意味を表わしていて、それぞれに見合う文脈が必要である(太田(1980: 336–40)参照)。

(53) *A [\*Any] dog suckles its young.*<sup>16)</sup>

(54) *Horses [\*All horses] are widespread.*

(53)は、おす犬が授乳できないことを考えると、*a dog* がまがりなりにも「種類」を表わす場合にのみ成り立つ内容である。(54)の *all horses* は、普通「馬はみんな」という配分的(distributive)な意味になるので、種類についての叙述に用いられる *extinct*, *common*, *widespread* のような述語と合わないらしい<sup>17)</sup>。その点、*like* や *want* は、(7d), (51), (8d), (52) などの例に見るように、種類の特徴も個体の状況もともに記述できるので問題がない。

*a Nsing* や  $\phi$  *Npl* は、総称的に用いられても、数量や位置が問題になる現実の世界になんらかのかかわりを残している。これに対し、(7e)の *the businessman* は、「実業家」というものを観念の世界で捉え、その種類の人間の全体を抽象的に表現する(宮田(1970<sup>2</sup>: 123–26); 注17))。

(55) *The horse is common [extinct].*

(56) *\*A horse is common [extinct].*

(55)だけが正用なのは、観念としての「馬」は時空を越えた存在だからであろう。(8e)の *the unemployed* もこの総称的な *the* に準じて考えることができる。一般に、冠詞の数量的・特定のな機能が抑制される文脈では、これと共に起する普通名詞の表わす「類質」が前面に出てくる。普通名詞の存在によって、類はずでに、つまり前提的(presuppositionally)に、指定されているからである(MEG, VII. § 14.3<sub>1</sub>)。

(7f)の *one* は、普通 *we*, *you*, *they* の総称人称(generic person)の用法と一緒に考えられ、1人称、2人称、3人称の別を越えすべての人称にわたる指示をする。ただ、この用法の *we*, *you*, *they* が本来の意味を含みとして残しているのに対し、*one* は無色で話し手も含め—ときにIの「隠れ蓑」(“*the invisible cap*”)になることもあって—漠然と人を指す。(8g)の *everyone* の指示は、*in the profit* の限定をうけて、特定化の方向にむかう。

(7g)のsome /sʌm/ studentsは、「学生」という種類の下位集団(subgroup)を指し、ほかの下位集団との対立を含意する：“..., but others (= other students) like art and literature.”(8h)のboys of his ageも、これに準じて考えることができる。それに対し、(7h)のsome /s(ə)m/ girlsは、「少女」という種類に属する個体の数量を示し、特定の指示をするので、there構文によるパラフレーズが可能である。

(57) There are some girls who don't like homemaking so much.

(7i) と (8i) も、同じようにパラフレーズできる。

(58) There is a civil engineer who likes one of their daughters.

(59) There are three girls who want a day off next Thursday.

一般に主語名詞句は、不透明(opaque)な文脈も含め、個別的(individually)にしる類別的(categorially)にしる、ある程度確定的(determinate)な指示をするのが普通である。

3.2. (7i)には別の配慮も必要である。どこの誰か名前——仮にJones——まで分かっているのに、なんらかの理由でそれを出さないか、あるいは、「土木技師」という性格づけに意味があるからかで、Jonesの代りに“a civil engineer”と言う場合である。これは話し手[書き手]が場面・文脈の諸条件を考えて指示対象(referent)をどう表現するかという問題で、名詞句の指示の語用論的に重要な側面である(毛利(1983:40-43)参照)。とくに、ここで取り上げたlikeやwantは、人のattitudesやpreferencesを表現する動詞である点で、注意が必要である。この種の述語は、自分について使った場合わくすると自己暴露のおそれがあり、他人について使えば不当な人格規定になる心配がある。そのNP<sub>1</sub>とNP<sub>2</sub>の選択と表現の仕方に用心と工夫が必要である。

(60) Some civil engineer likes one of their daughters.

(61) A certain civil engineer likes one of their daughters.

(60)の方が、もとの(7i)より、特定の人物が考えられていることがはっきりする。(61)は、それに加え、ある事情でその人物についての情報を伏せていることを意味し、しばしば軽蔑的な含みを伝える。

#### 注

- 1) Faucett & Maki(1952: 130; 243)やKučera & Francis (1967:5)を参照。
- 2) Jackendoff(1972: Ch.7)や毛利(1983:3章)参照。
- 3) wantの意味の曖昧さについては、Web Syn, s.v. Lack (v) 参照。
- 4) 特別に区別する必要がある場合を除き、「話し手」で「書き手」も代表させる。
- 5) Halliday(1985: § 5.3)はitとlike, know, thinkなどとの違和感—“a tension between the it and the meaning of the verb”—にふれている。が、このitは猫という「類」を指すので、特定の個体を指すitの場合と事情が違うように思う。なお注6を参照。
- 6) Lakoff(1974:332-33)はこと多少意見を異にするようである。

<15>(b) My cat believes that I'm a fool.

について、彼は“I and many others find <15b> perfectly all right, although some people do not.”と言い、

<16> My cat, who believes that I'm a fool, enjoys tormenting me.

<17> \*My cat, which believes that I'm a fool, enjoys tormenting me.



については, “Having had experience with a cunning feline, I find <16> both syntactically and semantically well-formed, while <17> is ungrammatical for me. Thus, *who* seems to refer not simply to humans, but to individuals being thought of as intelligent beings whatever their species. Judgements concerning its proper use will vary with the speaker's beliefs about such matters.” 関連して, Radford (1981:7-10) 参照。

- 7) 『平凡社大百科事典』の「かちく」の項が参考になる。
- 8) Cf. *Ency. Brit.*, s.v. Behaviour, Animal; Cat; Dog; Domestication, Plant and Animal; Horse; Pet. このほかに『平凡社世界大百科事典』の「かちく」の項も参照。
- 9) 松村編 (1969:11章) 参照。
- 10) 三宅 (1981: 26-27) 参照。なお, 注11を見よ。
- 11) Cf. Hooper (1975: 96): “A parrenthetical predicate such as *I think, I suppose, it seems* informs the hearer that the speaker may have mild reservations about the truth of the complement proposition, or at least that the speaker does not take the proposition to be a statement of absolute truth.” 注10も参照。
- 12) 安井編 (1975<sup>2</sup>), s.v. Echo-question.
- 13) Takeda (1981: 32) の定義参照。
- 14) Michaels (1968: 220) は “Generic” を [+Definite, -Particular] と規定している。
- 15) Michaels (1968: 220) からの例。
- 16) Burton-Robert (1976: 436) の “A [\* Any] whale suckles its young.” を下敷に。
- 17) Hewson (1972: 101) は

The [\* A] car has become very popular.

について次のように言っている: “A single car is a practical means of conveyance, but a single car is not necessarily popular; what is popular is the total indivisible phenomenon of the motor car, and nothing less.”

#### 参考文献

Dictionaries & Encyclopedias: —

*Chamber's* = *Chamber's Universal Learner's Dictionary*. Edingburg : W & R Chambers Ltd, 1980.

『大百科事典』16巻. 東京: 平凡社, 1985.

*Ency. Amer.* = *The Encyclopedia Americana*. 30 vols. U.S.A. : Grolier Incorporated, 1984.

*Ency. Brit.* = *The New Encyclopaedia Britannica*. 30 vols. Chicago : Encyclopaedia Britannica, Inc., 1975.

*Holt Basic* = *The Holt Basic Dictionary of American English*. New York : Holt, Rinehart and Winston, Inc. 1966.

*Kodansha Encyclopedia of Japan*. 9 vols. Tokyo : Kodansha, 1983.

*OALD* = *Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English*. Tokyo : Kaitakysha, 1974.

『世界大百科事典』33巻. 東京: 平凡社, 1972.

*Web<sup>3</sup>* = *Webster's Third New International Dictionary*. Springfield, Massachusetts : G. & C. Merriam Co., 1961.

*Web Syn* = *Webster's New Dictionary of Synonyms*. Ditto, 1968.

Burton-Roberts, N. 1976. “On the Generic Indefinite Article.” *Language* 52, pp. 427-48.

Carlson, Greg N. 1977. “A Unified Analysis of the English Bare Plural.” *Linguistics and Philosophy* 1, pp. 413-56.

江川泰一郎著. 1966.<sup>5</sup> 『英文法解説』東京: 金子書房.

Faucett, L. and I. Maki. 1952. *A Study of English Word-Values Statistically Determined from the Latest Extensive Word-Counts*. Tokyo : Shinozaki Shorin.

Halliday, M.A.K. 1985. *An Introduction to Functional Grammar*. London : Edward Arnold, Ltd.

- Hewson, J. 1972. *Article and Noun in English*. The Hague : Mouton & Co.
- Hooper, Joan B. 1975. "On assertive predicates." In J. P. Kimball (ed.), *Syntax and Semantics*, vol. 4, pp. 91–124. New York : Academic Press.
- 今井邦彦・中島平三共著. 1978. 『文(Ⅱ)』 東京 : 研究社.
- Jackendoff, Ray S. 1972. *Semantic Interpretation in Generative Grammar*. Cambridge, Massachusetts : the M.I.T. Press.
- Jespersen, O. 1909–49. *A Modern English Grammar on Historical Principles [MEG]*. 7 vols. Copenhagen : Munksgaard.
- Kučera, Henry and W. Nelson Francis. 1967. *Computational Analysis of Present-day American English*. Providence, R.I.: Brown University Press.
- Lakoff, G. 1971. "Presupposition and relative well-formedness." In D. D. Steinberg and L. A. Jakobovits (eds.), *Semantics*, pp. 324–40. London & New York: Oxford University Press.
- 松村明編. 1969. 『古典語・現代語助詞助動詞詳説』 東京 : 学燈社.
- Michaels, D. 1968. "Determining with the Definite Article." *Language Learning* XVIII, pp. 211–25.
- 三宅鴻 1981. 「教室英文法の試み (42)」『現代英語教育』18.6, 26–27頁.
- 宮田幸一著. 1970<sup>2</sup>. 『教壇の英文法』 東京 : 研究社.
- 毛利可信著. 1983. 『橋渡し英文法』 東京 : 大修館書店.
- 太田朗著. 1980. 『否定の意味—意味論序説—』 東京 : 大修館書店.
- Quirk, L. et al. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language [CGEL]*. London : Longman.
- Radford, R. 1981. *Transformational Syntax*. London & New York: Cambridge University Press.
- Takeda, Sh. 1981. *Reference and Noun Phrases*. 東京 : リーベル出版.
- 山梨正明著. 1986. 『発話行為』 東京 : 大修館書店.
- 安井稔編. 1975<sup>2</sup>. 『新言語学辞典』 東京 : 研究社.

(昭和61年10月11日受理)